

## 資料調査：上海のユダヤ人難民支援組織の医療委員会の報告書

阿部, 吉雄  
九州大学大学院言語文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/1470432>

---

出版情報：言語文化論究. 33, pp.107-116, 2014-10-14. 九州大学大学院言語文化研究院  
バージョン：  
権利関係：

## 資料調査： 上海のユダヤ人難民支援組織の医療委員会の報告書

阿 部 吉 雄

### はじめに

第2次世界大戦を含む約13年間（1938～1951年）、中国上海に中欧・東欧系ユダヤ人の難民社会が存在した。彼らは1938年3月のナチスドイツによるオーストリア併合から1941年6月の独ソ戦開始に至る時期に、ナチスによる迫害やドイツ軍の侵攻に追われ、当初入国ビザが不要だった上海租界へ逃れた約1万7000人のユダヤ人である。

これらの人々はドイツ、オーストリア、チェコスロバキア、ポーランド等の出身者であるが、言語、文化、習慣、社会制度などがヨーロッパとまったく異なる上海での生活に順応するのは容易でなかった。気候風土や衛生環境の違いによる健康面の問題も脅威のひとつだった。上海の夏は摂氏40度近くになり、湿度も高い。これに貧弱な衛生条件が加わり、ユダヤ人難民たちが故国で経験したことのない赤痢、腸チフス、マラリアなどが次々に流行した。寒い湿った冬もインフルエンザや呼吸器系の疾病をもたらした。

ユダヤ人難民の中には200人以上の医師、180人の歯科医、120人の看護師がいた。彼らは上海在住ユダヤ人による支援組織<sup>1</sup>や難民コミュニティの自治組織と協力し、脆弱な状態にある難民社会が直面するさまざまな健康上の危機に対応した。本稿の目的は、「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」(Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA)の医療委員会が上海共同租界工部局の公衆衛生局長に提出した1939年3月～1940年4月の活動報告書<sup>2</sup>をもとに、上海のユダヤ人難民社会の初期の医療状況を明らかにすることである。

### 報告書の序文

この報告書は医療委員会の委員長である Frederick Reiss 医師によって書かれた。<sup>3</sup> 報告書の序文で Reiss 委員長は、「混乱と経済的困窮の中で、私たちの難民に簡素で地味な、しかし十分な助けを与える組織をなんとか築き上げた」と述べ、また工部局の公衆衛生局長 J. H. Jordan 医師の協力と支援に感謝する。そして何よりも、自力で部屋を借りることができない最も貧しい2500人の難民用に数ヶ所設置されたハイムの管理者と、委員会が設置した病院およびハイムの医療スタッフの仕事を称えている。

### 医療委員会の発足と構成

1939年2月の時点で上海の中欧系ユダヤ人難民は4000人に達し、その数はさらに増加することが

予想された。彼らに食事と住居を与えるとともに、すぐに診察を受けられる医療サービスと重病者用の病院を提供することが必要だった。また「ヨーロッパでの悲惨な経験によって」、具体的には強制収容所におけるひどい扱いで身体的抵抗力を奪われた移住者たちは、慣れない上海の気候のせいで病気にかかりやすくなっていたため、ハイムに医療管理を導入することも急務だった。

Paul Komor の発案で CFA に医療委員会を設立することになり、1939年3月10日には Komor の他、W. Braun、S. Didner、T. Kunfi、I. Rosenzweig の各医師と、K. Schurtmann、J. Weinberger が話し合い、Komor と医師の Braun、Rosenzweig、C. Mosse からなる医療委員会が発足した。委員長には Rosenzweig が選ばれた。<sup>4</sup>

1939年4月11日に行われた第2回の会合で Rosenzweig 委員長が辞任し、医療委員会は Komor と医師の Braun、Mosse、F. Reiss に再編され、Reiss が委員長に就任する。

1939年7月、Mosse 医師が、そしてその後 Komor も辞職し、医療委員会の構成は医師の Reiss、Braun、H. Lange になった。<sup>5</sup>

1939年8月9日の会合に「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」(International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC) の代表として出席した女性医師の Selig-Toms が医療委員会の書記に選ばれた。

1940年2月に医師の E. Pribram 教授が医療委員会に加わり、副委員長に選ばれた。<sup>6</sup> その理由として Reiss 委員長は、医療委員会の業務が増え、メンバーを追加することが必要だったとしている。Pribram が担当した仕事として、住居と食事の補助金を CFA から受けるための診断書のチェックが挙げられており、難民社会の医師たちが書いた診断書が補助金を得るために必要だったことがわかる。また、診断書をチェックする業務を「やっかいな役割」と呼んでいることから、多くの人々が申請し、却下されるケースもあったことがうかがえる。

医療委員会にはさらにハイムや病院の医師たちの代表者 O. Freund、B. Szigeti、M. Gerber、S. Friedmann、A. Eberstark が時々招かれ、彼らとの連絡を密にし、彼らが必要としているものを直接聞く機会が設けられた。<sup>7</sup> また移住者医師たちの経済的福利に関係する事柄について、彼らの委員長と医療委員会の Reiss 委員長が時折話し合うことができるようにするという提案も行われた。<sup>8</sup>

## 医療委員会の活動

医療委員会は必要に応じて毎週または隔週で会合を開き、以下の問題を論じた。

- (1) 入院加療、および設立した諸病院の監督と改善への勧告。
- (2) 外来診療部門の開設。
- (3) 医療用品の購入や治療の承認、監督。
- (4) 医師、薬剤師、看護師、実験室技師の支援。
- (5) 卒後教育、応急手当授業の整備。
- (6) 診断書のチェック。
- (7) 各ハイムにおける衛生全般の監督。
- (8) 上海ユダヤ人青少年協会学校の学校衛生の監督。
- (9) 社会福祉事業。

医療委員会書記の Selig-Toms 医師はすべての医療用品の購入の管理、上海へ新たに到着した医師や看護師の登録、適当な人材による欠員補充を行った。<sup>9</sup>

また医療委員会が設置した病院やハイムを委員会の Reiss、Braun、Lange の各医師が定期的に訪

れ、多くの問題について助言を行った。

ユダヤ人難民医師たちは中国内陸部で職を得ることもあり、医療委員会は他の外国人医師とともにそのための助言や適切な人材の選出を行った。医学の勉強を終えたばかりの若いユダヤ人難民医師たちは Lester Hospital<sup>10</sup>や St. Lukes' Hospital<sup>11</sup>など上海の既存の病院で活動し、上海や熱帯の病気に精通する機会を得た。

アメリカドルやイギリスポンドに対して中国法幣の価値が低下しており、輸入医薬品の価格上昇は医療委員会にとって大きな問題だった。難民の中に多くいた糖尿病患者に必要なインシュリンは経済的に重い負担となっていたが、上海の外国人社会からインシュリン100本が寄付され、また赤痢が流行した時に数ダースの赤痢血清が無料で提供されたことを Reiss 委員長は感謝している。

医療委員会が設立される以前に上海に到着していた以下のユダヤ人難民医師たちも委員会の活動に協力し、無料で治療を行った。医師：H. Benedict, A. Koeroesi, I. Pressner, F. Berg, H. Lange, E. Pribram, W. Braun, L. Litten, F. Reiss, F. Czerwenka, A. Mandel, S. Sobel, D. Flater, F. Meyerbach, B. Schnepf, I. Hitschmann, E. Marcuse, M. Steiner, H. Hoffmann, M. Meller, G. Wolf, E. Kollmann, C. Mosse。歯科医：Gerendasi, B. Mandel, P. Schiller, M. Klatchko, M. Szattner、および歯科療法士：Margokiner。<sup>12</sup>

## 移住者病院

ユダヤ人難民が多く居住した蘇州河北側の虹口地区の Whashing Road (華盛路、現在の許昌路) に Komor が建物を入手し、移住者病院が1939年1月に開設される。男性用32床、女性用25床を備えたが、子供用はわずか3床だった。あらゆる内科的疾病、神経、皮膚、目の病気および性病が治療され、簡単な手術さえ行われた。Didner 医師がこの病院を組織し、苦しい状況下で1939年9月1日まで管理したが、8月19日に辞任を申し入れた。Didner の後任は、それまで Kinchow Road (荊州路) ハイムの外来診療部門および夏季疾病用病院の主任だった Freund 医師である。

1939年12月には、移住者病院内に T. Loewy 医師を担当者とする細菌の化学実験室が設置された。<sup>13</sup> 医療委員会の報告書が書かれた1940年4月までに、982件のさまざまな検査が404人の患者のために行われた。その中には576件の尿と便の日常的な分析と406件の特別な(痰、血糖、非タンパク質窒素、ビリルビンその他)検査が含まれる。この実験室には「中華全国キリスト教協進会」(National Christian Council) から薬品や器具その他の購入用に幾度も寄付が行われた。

1940年4月時点で、移住者病院は男性用40床、女性用31床、子供用3床まで増強されていたが、それでも十分でなく、1939年の夏には患者たちをペランダに配置することさえ余儀なくされたと Reiss 委員長は報告している。

移住者病院は精神病患者用の病室を持たず、中国紅十字会総医院<sup>14</sup>またはロシア人病院へ送らざるを得なかった。また外科の設備も不十分で、1939年12月まで大きな手術はすべて Shanghai General Hospital で実施された。<sup>15</sup> CFA は費用を節約するため、外科手術については Shanghai Sanitarium Clinic<sup>16</sup> と、エックス線検査とエックス線治療に関しては Country Hospital と契約を結んだ。<sup>17</sup> CFA はエックス線治療を必要とする人の一部しか支援できなかったが、Country Hospital は無料で移住者たちにエックス線やラジウムによる治療を施した。B'nai Brith Hospital もまた多くの貧しい患者を助け、医療委員会がジアテルミー(透熱)療法を依頼すると常に無料で行った。<sup>18</sup> 移住者病院には病気の子どもや妊婦の入院加療を行うスペースもなく、Shanghai Children's Hospital と Refugee Maternity Center が移住者のために無料でベッドを提供した。<sup>19</sup> American Foundling-House "The Cradle" も CFA に協力

し、両親が世話することのできない新生児たちを保護していた。

### 隔離病院と夏季疾病用病院

1939年5月上旬、虹口地区のユダヤ人難民の間で猩紅熱の深刻な流行が発生した。ただちに伝染病用の病院を設置することが必要になり、Chaoufoong Road（兆豊路、現在の高陽路）ハイムの近くの建物が最もふさわしい場所と考えられた。この流行は18人の患者で始まり、その後の増加は1日の新たな患者発生が32人にまで及び、患者数は最高128人に達した。<sup>20</sup> しかし死者を1人出しただけで、流行は徐々に収束し、1939年6月末には最後の患者7人が上海工部局の隔離病院（Isolation Hospital of the Shanghai Municipal Council）に移送された。<sup>21</sup> Mosse、Benedikt、Szigeti、Margulies 夫妻の各医師の努力により流行の拡大が食い止められたと Reiss 委員長は記している。<sup>22</sup>

1939年6月、夏季に増えるさまざまな伝染性の腸の病気用の病院を設置することが必要になる。当時、Chaoufoong Road の隔離病院には適当な設備がなく、Kinchow Road ハイムの一部に男性用35床、女性用30床、子供用7床のベッドが備え付けられた。Freund 医師がこの病院の責任者になり、Kinchow Road ハイムの外来診療部門の医師たちと協力した。

1939年9月に Chaoufoong Road 病院はすべての種類の伝染病のための隔離病院になることが決まり、夏季の疾病としてまだ Kinchow Road 病院で治療されていたわずかな患者たちは隔離病院へ移された。その管理は Szigeti 医師が引き継ぎ、Goetz 医師と Abisch 医師が補佐した。<sup>23</sup> Goetz が去った後、Ritter 医師が後任を務めた。<sup>24</sup> Ritter もまた中国内陸部へ行き、その後任はこの病院でボランティアとして働いてきた Ilieff 医師だった。<sup>25</sup>

### 上海ヨーロッパ系移住者提携病院

医療委員会は移住者病院と隔離病院を設置したが、増え続けるユダヤ人難民のためにさらなる対応が必要だった。1939年4月「上海ヨーロッパ系移住者提携病院」（European Emigrants Associated Hospitals for Shanghai）という名称の下、上海の指導的な住民たちからなる国際委員会が形成された。役員は委員長：Reiss、会計：Ellis Hayim、名誉幹事：Jacob M. Alkow、共同租界工部局代表：J. H. Jordan 医師、フランス租界公董局代表：Y. Palud 医師から構成され、19名の委員からなる執行委員会が置かれた。<sup>26</sup>

2度の会合の結果、上海の現状を伝えて寄付を募るために幹事の Alkow が1939年7月アメリカへ派遣されたが、Alkow からはアメリカもまた政治的不安定に深く巻き込まれており、見通しは芳しくないとの報告があった。<sup>27</sup> Reiss 委員長は Nuffield 卿、Einstein 教授、Samson Wright 卿、各地の聖堂そして国際赤十字等に財政的支援を請うたが、その努力はどれも成功しなかった。<sup>28</sup> 一方、上海在住のユダヤ人を含む上海の外国人社会は寄付の呼びかけに繰り返し応じており、さらなる支援を期待するのは難しかった。

上海の外国人社会からの支援について Reiss 委員長はいくつかの例を挙げている。Victor Sassoon 卿が寄付した鉄の肺（人工呼吸器の一種）は移住者だけでなく、すべての上海市民の使用に供され、また Horace Kadoorie 卿が購入したエックス線器具により、以前はかなりの費用を払っていたエックス線検査が可能になった。<sup>29</sup>

上海のパスツール研究所は赤痢の流行の間、毎日多くの検査を実施し、それはユダヤ人難民の患者の診断と治療に非常に役立った。患者のほとんどが赤痢ではなく、臨床的には赤痢ととても似て

いるサルモネラ菌腸炎だったからである。Reiss 委員長は上海租界の医師たちがユダヤ人難民に治療を施してくれたことを感謝し、上述の Jordan や Palud を初めとする 9 人の医師の名前を挙げています。

Reiss 委員長は赤痢が流行した時期にユダヤ人難民の感染者の死亡率がわずか 1 % だったことを指摘し、難民たちは精神的に万全でなかっただけなく、どちらかと言えば栄養不良だったにも関わらず、「私たちの死亡率を共同租界の統計と比較すると、流行が非常に穏やかな展開をたどったことが証明された」としている。Reiss 委員長はまた、カリフォルニアでの赤痢の流行の際の死亡率が 25.5% だったという記事も紹介している。さらに移住者病院の統計によれば、伝染病にかかった難民の大部分は食事をハイムではなく彼ら自身の家で取っていた。これはハイムの衛生状況が病気の発生を最小限にまで減らすのに十分なものだったことを示している。

### 外来診療部門

医療委員会は各ハイムに医師たちによる医療サービスを組織した。彼らは昼夜勤務し、すべての難民に応急手当を施すとともに、治療費を支払えない難民たちの治療も行っている。医療委員会はまた無料の薬を供給した。

### 総合病院

長い間の懸案だった Poly Clinic (総合病院) が実現間近だと Reiss 委員長は伝えている。以下のさまざまな分野の専門医が週 2 ~ 3 回、1 ~ 2 時間ずつ働くことを想定している。外科：Hans Hoffmann、皮膚科：Imre Kocsard、婦人科：B. Zelnik、内科：Joseph Preuss、小児科：Robert Koenigstein、耳鼻咽喉科：H. Weiss、肺疾患：S. Bader、神経科：Irene Hitschmann、精神科：V. Kalmar Fischer、エックス線治療：Loewenstamm、泌尿器科：Kneucker、歯科：Paul Abraham。<sup>30</sup> この Poly Clinic 構想が実現したかどうかは不明である。

### 中央薬局

1940年3月1日、移住者病院、隔離病院（複数）、すべてのハイムの外来診療部門、そしてまた CFA の保護下にある貧しい患者に無料の薬を供給するために中央薬局が開設された。中央薬局は Kinchow Road ハイムに置かれ、職員は H. Bergstein (管理者)、B. Ruff、A. Friedeberg の 3 名だった。<sup>31</sup>

医師によって処方箋のばらつきがあることから生じる費用を節減するため、Pribram 教授の監督の下、標準的な治療のリストが以下の医師たちにより作成された。Dagobert Flater、Horst Lange、Arthur Mandel、Hugo Weiss、Robert Koenigstein、v. Toms、Bruno Schnepf、H. Bergstein。<sup>32</sup>

### 学校衛生事業

生徒の保護と健康管理のために、Salomon 医師が「上海ユダヤ人青少年協会学校」(Shanghai Jewish Youth Association School / S.J.Y.A. School) の学校医に任命された。<sup>33</sup> 各学期の初めに生徒たちはエックス線検査を含む健康診断を受ける。Reiss 委員長は医療委員会が B.C.G. ワクチンによる結核病の予防接種を計画中であると報告している。Salomon は衛生状況に関する講習会を定期的に行うとともに、子どもたちに応急手当を教えた。

## 社会福祉事業

担当の Wolffheim 夫人の職務は妊婦たちに助言を与えることと、医師の指示について監督し、もしそれが忠実に履行されていなければ担当医に報告するか、妊婦に直接助言を与えることだった。<sup>34</sup> さらに彼女は、講習会に参加しないか、委員会が刊行した衛生に関する説明書を読む機会がない家族に、上海における衛生状況や疾病に関する教育を行う権限が与えられていた。彼女はまた、新生児が肌着を持っていない場合や、家族が貧しくて必要な食事や石炭を買うことができない場合について報告を行った。そのような事例はすべて重大な結果につながるということが分かっており、医療委員会は CFA だけでなく、個人からの支援にこれまで以上に頼っていると Reiss 委員長は伝えている。

Reiss 委員長はまた、American Foundling-House “The Cradle” が新生児の世話をしただけでなく、親が待ち望んだ子どもの肌着がない家族に新生児用の衣服一式を与えたと感謝を述べている。

## 産科病棟

Reuben D. Abraham 夫人と David E. J. Abraham 夫人の支援により、4床を備える産科病棟が Ward Road (華徳路、現在の長陽路) ハイムに開設された。<sup>35</sup> 職業訓練で大工や家具職人の仕事を習っていたユダヤ人難民たちが部屋をしつらえ、病棟には設備の完備した手術室が付属していた。担当医の R. Perth に加え、R. Haberfeld が管理責任者だった。<sup>36</sup>

## 終わりに

医療委員会の報告書に氏名を記載されたユダヤ人難民の医師は57名(難民でなかった Reiss 委員長を含めず)、歯科医5名、歯科療法士1名、薬剤師2名、看護師1名である。この他にも、何らかの形で医療委員会の活動と関わった医療関係者は少なくなかったであろう。医療委員会の報告書から、上海租界の他の病院がユダヤ人難民の治療に協力していたことも明らかになった。

これらの結果、上海移住の1年目、2年目の1939年、1940年の難民の死亡者数はそれぞれ131人、130人に抑えられた。特に1939年はハイムや病院、診療所をゼロから立ち上げたにもかかわらず、死亡率(人口1000人あたり)は8.2となり(ユダヤ人難民の数を1万6000人として計算)、2010年の日本の死亡率9.5よりも低い。上海のユダヤ人難民には中高年が多く、平均年齢は1939年時点で40歳前後だったと考えられる。ヨーロッパから上海への移住に伴う環境の変化は、特に高齢者にとって大きな脅威だったであろう。太平洋戦争中は食料や医薬品の不足と援助資金の枯渇による病院の閉鎖のため、難民の健康状態が悪化し、死亡者数は1942年320人、1943年311人、1944年260人、1945年262人と高い水準で推移した。<sup>37</sup>

## 注

- 1 ユダヤ人難民が上海に到着し始めた1938年8月、「ヨーロッパ系難民救援国際委員会」(International Committee for Granting Relief to European Refugees / IC) が設立された。1938年10月にできた「上海ヨーロッパ系ユダヤ人難民支援委員会」(Committee for the Assistance of European Jewish Refugees in Shanghai / CFA) が1939年8月、それまで IC が行ってきた病院と救急診療所の組織と運営を引き継いだが、1939年12月 Victor Sassoon を委員長とする「在中国

- ヨーロッパ系移住者支援国際委員会」(International Committee for European Immigrants in China / IC) が新たな IC として誕生した。
- 2 この報告書はタイプライターを使い、英語で書かれている。上海市档案馆に「欧州猶太人難民総合性材料——衛生条件。日本当局管理情况等。1939 - 1944年」として保管されている資料の一部である。
  - 3 The New York Times は1981年11月22日、Reiss の死亡を伝えた。享年90歳。記事によると、彼はハンガリーで生まれ、1914年ハンガリー王立大学で学位を取得した。1920年代初め、中国で皮膚病学を教え、上海の国立中央大学（後の上海医科大学）の皮膚病学部門を立ち上げた。第2次世界大戦（太平洋戦争）の直前にアメリカに渡った。医療委員会の報告書の「上海ヨーロッパ系移住者提携病院」の項では Prof. Reiss と書かれており、上海の国立中央大学で教授を務めていたと推測される。
  - 4 Paul Komor は IC の責任者で、1898年から上海に在住し、キリスト教に改宗したハンガリー系ユダヤ人実業家。W. Braun は、上海の The New Star Company という出版社から1939年11月に発行された『Emigranten Adressbuch』（移住者住所録）に「Dr. Walter Braun、Graz 出身、内科医」と記載されている。また、中欧・東欧系ユダヤ人難民は日本軍によって1943年5月以降蘇州河北側の虹口・揚樹浦地区に居住するよう強制されたが、この地区を管轄する提籃橋分局特高股が1944年8月に作成した『外人名簿』に、W. Braun は「50歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。S. Didner は『外人名簿』に「Samuel Didner、39歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。T. Kunfi は『移住者住所録』に「Dr. Tibor Kunfi、ウィーン出身、医師」と、『外人名簿』に「48歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。J. Weinberger は『外人名簿』に「Julius Weinberger、52歳、シャツ製造、ドイツ難民」と記載されている。C. Mosse は『移住者住所録』に「Dr. Mosse、IC および CFA」と記載されている。
  - 5 H. Lange は報告書の「中央薬局」の項で言及される Horst Lange と思われる。
  - 6 E. Pribram は『移住者住所録』に「Prof. Dr. Egon Pribram、医師」と記載されている。
  - 7 O. Freund は『移住者住所録』に「Dr. Otto Freund、ウィーン出身、医師」と記載されている。B. Szigeti は『移住者住所録』に「Dr. Bela Szigeti、ウィーン出身、医師」と、『外人名簿』に「54歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。M. Gerber は『移住者住所録』に「Dr. Max Gerber、Innsbruck 出身、医師」と記載されている。S. Friedmann は『移住者住所録』に「Dr. Salomon Friedmann、ウィーン出身、医師」と、『外人名簿』に「47歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。A. Eberstark は『移住者住所録』に「Dr. Arnold Eberstark、医師」と、『外人名簿』に「50歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。
  - 8 難民医師たちはヨーロッパでほとんど扱ったことのない様々な病気に関する知識と経験を共有するため、1939年に「移住者医師連合」(Vereinigung der Emigranten-Aerzte) を設立した。この組織は会報と医学雑誌を出版したが、数回の会合の後に消滅してしまった。1940年にはユダヤ人難民が多く居住した虹口地区の難民医師だけからなる「虹口医師協会」(Hongkewer Aerzte Verrein) が設立され、毎月2回専門的な討論会を行うなどその後ずっと活動を続けた。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“. Hoboken, New Jersey (KTAV Publishing House) 1988 (<sup>1</sup>1976). S. 302 u. 307.
  - 9 支援組織の IC が1939年4月15日までに行った難民の職業登録によれば、3116人の登録者のうち医師は57名、歯科医は13名に過ぎず、『移住者住所録』や『外人名簿』に記載された医師や歯科医の人数に比べて非常に少ないことから、ユダヤ人難民医師の多くは1939年4月以降、上

- 海租界当局がユダヤ人難民の流入制限を始めた8月までの間に上海に到着したことが推測される。拙稿：「上海のユダヤ人『移住者住所録』（1939年11月）と興亜院華中連絡部の『上海ニ於ケル猶太人ノ状況（主トシテ歐洲避難猶太人）』（1940年1月）」、『言語文化論究』（18）、2003年、九州大学大学院言語文化研究院、119頁。
- 10 1846年に設立された仁済医院。1861年に蘇州河南側の共同租界の麦家圈（現在の山東中路）145号へ移転した。
  - 11 1866年に設立された同仁医院。1939年当時は蘇州河にかかるガーデンブリッジの北側の Seward Road（熙華徳路、現在の長治路）と Boone Road（文路、現在の塘沽路）と南潯路にはさまれた三角地にあった。
  - 12 Reiss 委員長の記述を信用すれば、ここに挙げられた医師たちは1939年3月以前に上海に到着していたことになる。H. Benedict は『移住者住所録』に「Dr. Hans Benedikt、ウィーン出身、医師」と記載されている。I. Pressner は『移住者住所録』に「Dr. Isidor Pressner、呼吸器および心臓の疾病の医師」と記載されている。F. Berg は『移住者住所録』に「Dr. F. Berg、Karlsbad 出身、医師」と記載されている。H. Lange については注5を、E. Pribram については注6を、W. Braun については注4を参照。L. Litten は『移住者住所録』に「Dr. Ludwig Litten、ベルリン出身、婦人科医師」と、『外人名簿』に「46歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。F. Czerwenka は『移住者住所録』に「Dr. F. Czerwenka、ウィーン出身、医師」と記載されている。A. Mandel は『外人名簿』に「Arthur Mandel、45歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。S. Sobel は『移住者住所録』に「Dr. S. Sobel、ウィーン出身、医師」と、『外人名簿』に「Siegmond Sobel、44歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。D. Flater は『移住者住所録』に「Dr. Dagobert Flater、ベルリン出身、医師」と、『外人名簿』に「59歳、一般外科医、ドイツ難民」と記載されている。F. Meyerbach は『移住者住所録』に「Dr. F. Meyerbach、眼科専門医」と記載されている。B. Schnepf は『移住者住所録』に「Dr. Bruno Schnepf、医師」と、『外人名簿』に「54歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。I. Hitschmann は報告書の「総合病院」の項で言及される Irene Hitschmann と思われる。同一人物かどうか不明だが、『移住者住所録』に「Dr. J. Hirschmann、ウィーン出身、女性医師」と記載されている。E. Marcuse は『移住者住所録』に「Dr. Erich Marcuse、外科医」と記載されている。M. Steiner は『移住者住所録』に「Dr. Max Steiner、医師／婦人科専門医」と記載されている。H. Hoffmann は『移住者住所録』に「Dr. Hans Hoffmann、ベルリン出身、外科医」と記載されている。M. Meller は『移住者住所録』に「Dr. M. Meller、イタリア出身」と記載されている。G. Wolff は『移住者住所録』に「Dr. Gerhard Wolff、ベルリン出身、外科医／腎臓および膀胱疾患専門医」と記載されている。E. Kollmann は『移住者住所録』に「Dr. E. Kollmann、ウィーン出身、医師」と、『外人名簿』に「Ernst Kollmann、53歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。C. Mosse については注4を参照。Gerendasi は『外人名簿』に「Joseph Gerendasi、37歳、歯科医、ドイツ難民」と記載されている。M. Szattner は『外人名簿』に「Moriz Szattner、52歳、歯科医、ドイツ難民」と記載されている。Margokiner は『移住者住所録』に「Leon Margoliner、ベルリン出身、歯科療法士」と記載されている。
  - 13 T. Loewy は『移住者住所録』に「Dr. Tibor Loewy、ブダペスト出身、医師」と記載されている。
  - 14 フランス租界の Route Alfred Magy（麦琪路、現在の烏魯木齊中路）12号の Chinese Red Cross。1907年に創設された。
  - 15 北蘇州路190号にあった公済医院。上海初の外国人用病院として1864年にフランス租界に開設

- し、1877年に蘇州河北側に移転した。
- 16 1929年、西部越界築路区域の Rubicon Road（羅別根路、現在の哈密路）1713号に創設された Shanghai Sanitarium and Hospital（上海療養院）のことか。
  - 17 Shanghai Country Hospital（宏恩医院）は1926年、西部越界築路区域の Great Western Road（大西路、現在の延安西路）221号に創設された。
  - 18 上海在住のセファルディ系ユダヤ人社会が1934年にフランス租界に創設した総合病院。ユダヤ人難民医師も雇用された。David Kranzler: „Japanese, Nazis & Jews — The Jewish Refugee Community of Shanghai, 1938-1945“, S. 55 u. 301f.
  - 19 Shanghai Children’s Hospital は1937年に創設された難童医院。1940年に上海児童医院と改称された。Refugee Maternity Center は1937年11月の上海事変で生じた中国人避難民の妊婦のための病院で、赤十字が支援した。
  - 20 日本側の調査では感染者の総数は350人と報告されている。Herman Dicker: „Wanderers and Settlers in the Far East. A Century of Jewish Life in China and Japan“. New York (Twayne Publishers) 1962. S. 85.
  - 21 蘇州河北側の Range Road（老靶子路、現在の武進路）85号の工部局避病院。
  - 22 Margulies 夫妻は『外人名簿』に「Egmont Margulies、45歳、医師、ドイツ難民」、「Margit Margulies、36歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。
  - 23 ここで言及されている Goetz に該当すると思われる人物について、『移住者住所録』に「Dr. Alfred Goetz、医師」と「Dr. Rudolf Goetz、ベルリン出身、医師」の2名の記載が見られる。『外人名簿』でも同様に「Alfred Goetz、45歳、医師、ドイツ難民」と「Rudolf Goetz、45歳、医師、ドイツ難民」の記載がある。Abisch は『外人名簿』に「David Abisch、39歳、医師、無国籍難民」と記載されている。
  - 24 Ritter は『移住者住所録』に「Dr. Ernst Ritter、ウィーン出身、医師」と記載されている。
  - 25 Ilieff は『移住者住所録』に「Dr. Mois Ilieff、ウィーン出身、歯科療法士」と、『外人名簿』に「43歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。
  - 26 19名の執行委員には Ellis Hayim（1886-1976）を除く4名の役員が含まれ、Hayim と同様にセファルディ系ユダヤ人富豪である Reuben D. Abraham、Elly Kadoorie（1867-1944）、Victor Sassoon（1881-1961）などの名前も見られる。
  - 27 Jewish Telegraphic Agency は1939年7月9日、上海から以下のように伝えた。「上海の約1万2000人の難民のための公共医療施設を組織する必要性から、ヨーロッパ系移住者提携病院委員会が生まれた。当地の難民の数は年末には2万人にまで増加すると見込まれている。委員会の名誉幹事 J. M. Alkow は基金を集めるためアメリカへ向けて出発する」。また9月12日にはニューヨークから以下のように伝えた。「上海の1万8000人のユダヤ人難民の約半数が、海外からの慈善または個人的支援に完全に依存していると、本日当地に到着したロサンゼルスの実業家で、中国でかなりの期間を過ごした J. M. Alkow は述べた。上海ヨーロッパ系移住者提携病院委員会の名誉幹事である Alkow は、病院の状況が特に深刻だと言った。この委員会の委員長であり、上海のハンセン病院の所長である Frederick Reiss 医師から、状況は絶望的であり、基金が「緊急に必要な」との電報を受け取ったと彼は語った。Alkow によれば、多くの難民がナチスの強制収容所にいた結果、内科的および神経的な病気に苦しんでいる。事実上すべての難民が治療のために公共施設に頼っているが、上海（共同租界）当局はユダヤ人社会が難民の病気の世話をしよう要求したと彼は言った」。

- 28 「Nuffield 卿」はイギリスのモーリス自動車会社の創立者 William Richard Morris (1877-1963)。慈善家として知られ、Nuffield 基金を創設した。Albert Einstein (1879-1955) は1922年の日本訪問の際に上海に立ち寄っている。Samson Wright (1899-1956) はイギリスの生理学者。
- 29 Horace Kadoorie (1902-1995) は Elly Kadoorie の息子。
- 30 Hans Hoffmann については注12を参照。Imre Kocsard は『移住者住所録』に「Dr. Imre Kocsard、ブダペスト出身、医師」と記載されている。Robert Koenigstein は『移住者住所録』に「Dr. Robert Koenigstein、ウィーン出身、医師」と記載されている。H. Weiss は『移住者住所録』に「Dr. Hugo Weiss、ウィーン出身、医師」と記載されている。S. Bader は『移住者住所録』に「Dr. Siegfried Bader、ベルリン出身、医師」と記載されている。Irene Hitschmann については注12を参照。Loewenstamm は『外人名簿』に「Alfred Loewenstamm、45歳、医師、ドイツ難民」と記載されている。Kneucker は『外人名簿』に「Arthur Kneucker、40歳、医師、オーストリア難民」と記載されている。Paul Abraham は『移住者住所録』に「Dr. Paul Abraham、ベルリン出身、歯科医」と記載されている。報告書には最後に「A. Posner 夫人」という記載があるが、『移住者住所録』および『外人名簿』に該当する人物は見当たらない。
- 31 B. Ruff は『移住者住所録』に「Berthold Ruff、ウィーン出身、薬剤師」と、『外人名簿』に「62歳、無職、ドイツ難民」と記載されている。A. Friedeberg は『移住者住所録』に「Adolf Friedeberg、Breslau 出身、デザイナー」と、『外人名簿』に「49歳、美術家、ドイツ難民」と記載されている。一方、Erich Friedeberg という人物が『移住者住所録』に「Krone 出身、薬剤師」と、『外人名簿』に「52歳、従業員、ドイツ難民」と記載されており、こちらの間違いではないかと考えられる。
- 32 Pribram については注6を、Dagobert Flater と Arthur Mandel については注12を、Hugo Weiss と Robert Koenigstein については注30を、Bruno Schnepf については注12を参照。H. Bergstein は中央薬局の管理者であり、Magister (修士)。他は Dr. (ドクター)。
- 33 Salomon については『移住者住所録』に「Dr. Harry Salomon、ベルリン出身、医師」という記載があり、また『外人名簿』には別人の「Paul Salomon、58歳、医師、ドイツ難民」という記載がある。S.J.Y.A. School は Horace Kadoorie がユダヤ人難民の子弟のために1939年11月有恒路(現在の余杭路) 647号に設立した。7学年からなり、最初380人の生徒を受け入れた。James R. Ross: „Escape to Shanghai — A Jewish community in China“. New York (The Free Press) 1994. S. 151.
- 34 Wolffheim は『外人名簿』に「Kaete Wolffheim、52歳、看護師、ドイツ難民」と記載されている。
- 35 Reuben D. Abraham については注26を参照。David E. J. Abraham は Reuben D. Abraham の父。
- 36 R. Haberfeld は『外人名簿』に「Rudolf Haberfeld、66歳、管理者、オーストリア難民」と記載されている。
- 37 Siegfried Englert: „Sechs dürfen unter einem Gebetsschal beten. Zur Geschichte der Juden in Shanghai 1937-1945“. In hrsg. v. Reichert, Folker / Englert, Siegfried: „Shanghai. Stadt über dem Meer“. Heidelberg 1996. S. 121f.

本稿は JSPS 科研費24520806の助成を受けたものです。